

社会科授業の一考察

— 日本とシンガポールの消防のしくみを題材として —

前シンガポール日本人学校チャンギ校 教諭

愛知県安城市立安祥中学校 教諭 松 碕 信

キーワード：社会科，現地理解，教材化，副読本

1. はじめに

シンガポール日本人学校では、教科書を通して日本の社会的仕組みを教え、副読本でシンガポールならではのものを教授している。ただし、時間には限りがあり、両方を別々に教えるのは不可能に近い。そこで『3. くらしをまもる (1) くらしと火事』の単元を通してどのように両国の事情を効率よく教えていくのが良いのかを考えていくことにする。平成11年に発行された学習指導要領には、「地域社会における災害及び事故から人々の安全を守る工夫について、次のことを見学したり調査したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や努力を考えるようにする」と書かれている。シンガポールでこの大きな目標を達成するためにはどのような実践を行ったらよいか考えていきたい。

2. 単元計画

(1) 工夫するところ

- ①教科書と副読本の提示の仕方。
- ②体験を取り入れる。(学校の消防施設さがし、消防博物館見学)
- ③自作視聴覚器機(ビデオ)の活用
- ④子ども達の思考に沿った授業作り

(2) 授業計画(全13時間)

- | | |
|---------------------|-------------|
| ①火事が起こったら | (日本) |
| ②119番をしたらどこにつながるのか。 | (日本) |
| ③シンガポールではどこにつながるのか。 | (シンガポール) |
| ④現場に速く着く工夫。 | (シンガポールと日本) |
| ⑤消防士の日、消防士の苦労と思い | (シンガポールと日本) |
| ⑥消防士と消防団のちがいがい | (日本) |
| ⑦学校の消火設備、施設調べとまとめ | (シンガポール) |
| ⑧自分たちでできることは、火事の原因 | (シンガポール) |
| ⑨～⑪ 消防博物館への見学 | (シンガポール) |
| ⑫・⑬ 消防の学習をふりかえって | (シンガポールと日本) |

(3) シンガポールと日本の消防に関する比較

	日 本	シ ン ガ ポ ー ル
連絡	消防管制室から各場所へ	通信司令室から各場所へ
救急車	消防署にある。	消防署にある。
消防士の主な一日の仕事	訓練及び点検	訓練及び点検
現場まで	連絡を受けてから5分で到着	連絡を受けてから1分で出発
火事の原因	放火	ごみからの出火
速く着くための工夫	連絡経路, 訓練, 点検, 整とん, チームワーク, 服, 勤務シフト	連絡経路, 訓練, 点検, 整とん, ポール, 服, 勤務シフト
消防士の思い	市民を守りたい。	国民を守りたい。
市民の協力	消防団, 訓練	訓練
学校の設備	各クラス煙探知機, 熱感知機, 消火栓, 消火ホース消火器, 防火扉, ガス感知器, 非常階段	道場に煙探知機と防火扉, 家庭科室にガス感知器, 消火器, 消火栓, 非常通路, 消火ホース

ほとんどが日本の体制と同じである。シンガポールが各国の精選された消火体制をまねて作った物であるから、当然とも言える。消防士の思い、市民の協力、速く現場に着くための工夫など、子どもたちがおさえるべき点も同じである。よって、非常に似通った部分は平行して、違う部分は比較して指導することにした。

3. 実践

(1) 火事が起こったら

初めは教科書を使って、火事が起こったら、だれがどのように行動するのか、教科書の絵を見て話し合った。授業後の感想では、速さや消防士の苦勞に言及している子が何人かいた。

次の時間は、発見者が119番に電話をしたらどのように連絡が伝わるかをグループごとに考えた。発見者→消防署→管制室→警察→病院→水道局・電気・電力会社の順が多かったが、一班だけ管制室につながり、あとは全体に広がるという考えを出した。本時は、その考えた理由を深く追究せずに正解だけを確認し終わった。ここでは、「消防管制室とは何なのか」「なぜ必要なのか」などの疑問が増えていることが分かった。そこで、第3時の時間でシンガポールの連絡態勢を学ぶ際、発展という意味と日本の連絡体制の確認という意味で授業を進めた。

第3時の主発問は「どうして消防管制室（シンガポールでは通信司令室）は、必要なのか。」である。この発問により、シンガポールと日本にかかわらずこの通信指令の態勢は、現場に速くつながるための工夫なのだと言う結論が出た。

(2) 現場に速く着くための工夫

現場に速く着くための工夫は、日本でもシンガポールでもほとんど変わらなかった。だから、そのことを前提として平行して指導をした。副読本を見て、脱いだままの服、ポール、勤務形態、訓練をあげていたが、それだけでは臨場感が足りず、知識だけを埋め込むことになってしまうと考え、日本で作成したビデオを視聴させた。このビデオは、消防士の一日、消防団の仕事、自分たちでできることの3つの柱で構成されており、今回は消防士の一日だけを視聴させた。このビデオを見たことで日々の訓練や点検の様子、整理整頓の大切さが一目でわかり、消防管制室からどのように消防署に伝わって現場に移動するのもわかった。また、教師により日本の消防署で見てきたこと、シンガポールの消防署で見てきたことを子どもたちに説明した。どの消防士も過酷な訓練をして、それでも人の命を預かる身であるからがんばっているという思いを紹介した。児童Aは、振り返りの感想でこのように述べている。「わたしは、この勉強やビデオを見て、消防署の人は、1分で服を着て出動したり、いつでも行けたりするようにしてあるし、チームワークがよくて、あと、消防署の人たちは練習はとてつらいけど、それでもわたした

ちが安全に安心して暮らせるようにしてくれているので、消防署の人たちは、とてもすごいと思いました。」

子どもたちの疑問の中で、消防署と消防団の違いが分からないという声があったので、一時間を使って、消防団と消防署の違いについて話し合った。多くの子は、いっしょであり、消防団は小さいものであるという意見であったが、教科書の消防管制室からの連絡の場面では消防団は別の場所に書いてあったため、消防管制室から連絡はいていないということが分かった。そこで再び消防団についてのビデオを視聴した。ビデオを見たことで、消防団の人は、別の仕事を持っている、消防署の手伝いをしている、地域を守っている人だということがわかった。また、ビデオに、みんなの周りにも消防に関する物があるので探してみようと意欲付けがされていたため、次の時間に学校内の消防施設を探検することにした。

(3) 学校探検

学校にはどのような消防施設や設備があるのかについて問いを投げかけたところたくさんの解答がでた。それらの解答を3つに分けてごらんと再び問いを投げかけたら様々な分け方が出た。中でも①火を消す物、(消火器、ホース) ②命を助けて逃げるためのもの(出口の看板、防火扉) ③火を知らせる物(非常ベル、煙探知機)の3つが一番分かりやすいという話し合いになった。

それぞれの働きを確認した後、学校内の探検にグループで出かけた(写真1)。振り返りの児童Bの感想は次の通りである。「学校にもいっぱい火事のことを守るものがあった。いっどこで何が起きても良いようにホースや消火器があった。いつもはあまりないと思っていたけど学校にはいっぱいあった。」体験を取り入れたことで初めて気づくことも多くあることがわかった。



(写真1) 学校探検

(4) 自分たちにできることは

「どういう場合に火事がおきるか」「シンガポールで起きた事件の原因を考える」「自分たちでできることは」の3つをまとめとして話し合った。シンガポールではたばこの不始末が多くの要因であることに子どもたちは驚き、火事を事前に防ぐために必要なことが多くあることに気づいた。また、シンガポールの5年生の教科書を提示し、シンガポールの人々も訓練したり、救急法を学んで助け合っていることを伝えた。

(5) 消防博物館

2月の末に消防博物館に行った。これは、今まで培ってきた学びのまとめとして色々な視点で見学できるようにと最後にもってきた。見学後の次の時間には消防の新聞を個人で作る活動を組み込んだ。消防博物館は、シンガポールで始めて作られた消防署で、日本語ガイドの機械もあり、子どもたちにとってすばらしい教育施設であると感じた(写真2)。



(写真2) 消防博物館

4. 実践を通して

授業の締めくくりには必ず振り返りをし、その時間で思ったこと、わかったこと疑問に思ったことなどを記入させた。そこで、次の授業はどのような授業を組み込もうかという大きな指針ができ、とても良かったと思う。また、ビデオの視聴は子どもたちが必要でない情報を与えてしまうために扱いが難しかったが、必要な部分だけを見せて話し合わせることで効果的に活用できた。教科書と副読本の活用は比較したり、まとめとして使用したりまんべんなく使用できたと思う。初めに学校内の探検を組むことから始めたり、消防博物館から始めるような多様な導

入が考えられたが、教科書の流れにそって副読本を効果的に使うという使用形態が流れとしては自然なのではないかという結論に至った。あらかじめ、教師が日本とシンガポールの似ている点、違っている点を把握した上で活動することの大切さを改めて感じた。

5. 終わりに

シンガポールの小学校5年生の教科書の中に消防に関するページがある。一部を訳す「シンガポールでは、緊急時に間に合うよう準備しなくてはなりません。シンガポール市民は、救助の仕事の訓練を行ったり、緊急時の練習も行っています。これは、みんなが社会の中で緊急時に何をしたらよいかを確実に知るためです。」シンガポールでも日本でも国が違っても行うこと、市民性、思想は同じなのである。これからも、教師自身が子どもとともに学びあえることを大切にしていきたいと思う。